片山幸一先生の御退任を惜しむ

片山幸一先生は平成25年３月31日をもって、本学を定年退職される。先生は、昭和49年に助手として明星大学に赴任し、翌昭和50年に人文学部経済学科の専任講師に就任され、爾来、40年近く経済学科で経済史の教育に尽力された。

先生は昭和17年４月19日、栃木県にお生まれになり、昭和30年３月に世田谷区立三宿小学校、昭和33年３月に世田谷区立新星中学校、昭和36年３月に私立世田谷高等学校（現　世田谷学園高等学校）を卒業された後、昭和36年４月、中央大学経済学部に進学された。経済学部では、西洋経済史の林達教授のゼミに属した。昭和40年にご卒業と同時に、同大学大学院経済学研究科に進まれ、林教授の他、フランス経済史の大淵彰三教授、トマス・モアの研究で有名な田村秀夫教授らから経済史研究の指導を受けられた。片山先生は昭和43年に修士論文として、「フランス革命の成立」と題する研究を著され、

同年４月に同大学大学院の博士課程に進学された。

片山先生は明星大学の学訓である「健康・真面目・努力」を自ら率先して、教育の分野で発揮されただけでなく、その優しいお人柄にもかかわらず、学生の指導は厳しく、片山ゼミの卒業生として現八王子市長等を輩出し、しっかりとした人材を育て上げてきた。経済史は「世紀」単位の経済変化を対象とする学問分野なので、短期的な浮沈に惑わされない、長期的な視野を持った人材を世に送られた。

片山先生は銀行業、機械工業、鉄道、製鉄業、飲料(茶・コーヒー)、海運業など、フランスとの比較も交えながら、イギリス産業革命期に関する包括的な30本あまりの貴重な論文を『明星大学経済学研究紀要』に地道に発表された。イギリスの産業革命自体、日本では1970年代までに多くが知られるところとなったので、話題を呼ぶことは少なかったが、日本での西洋経済史の研究水準をあげるのに貢献された。視点がぶれない、その研究姿勢は片山先生のお人柄を表している。

研究内容は学部生向けにわかりやすく、西洋経済史の教科書(共著)の形で、『エコノミクスQ&A-西洋経済史』(昭和53年)、『図説新版西洋経済史』(昭和55年)、『一般経済史』(昭和62年)、『西洋経済史要説』(平成２年)にまとめられ、同じく共著の形で発表された、『世界史に見る工業化の展開-二重性-』(平成11年)と『経済史を学ぶ-工業化の史的展開-』(平成19年)では、編集者としても労をとられた。

片山先生は平成13年の経済学部の設立にあたっても、広い視野で取り組まれて、時の経済学部長が病気入院した際には、教務委員長並びに学部長補佐のお立場で学部長代理を務められた。青梅校舎の情報学部経営情報学科が平成17年に日野校舎に移転して、経済学部経営学科として統合された際にも、そのために尽力された。平成21年には、片山先生は経済学部長として就任して、ややもすると学科間の対立がありがちな雰囲気の中で、経営学科と経済学科の協力関係を築き上げられた。

明星大学　経済学科
須山光一
児島秀樹